怨みと鎮魂

――源氏物語への一視点――

日向一雅

1

比較的あっさりした人物紹介ではあるけれど、若菜上巻の藤壺女御と宿木巻の藤壺女御の置かれた状況は、別人と思えないほどよく似ている。前者が先帝の源氏であり、後者が左大臣の娘であるという出自の高さをはじめとして、いずれも帝の東宮時代に入内し、女宮ひと所を生むが、朧月夜尚侍、明石中宮という権勢家の后妃に圧倒され、不遇感を抱いて没する。「世の中をうらみたるやうにて亡せ給ひにし」（日本古典全書本『源氏物語』「若菜上」四―一六頁。以下『源氏』の引用は同書による）、「わがいとくちをしく、人に圧され奉りぬる宿世、なげかしく覚ゆる」（「宿木」六―一三二頁）というのが、かの女たちの不遇意識である。かの女たちは怨みを抱いて死んだのである。朱雀院と今上帝が残された女宮たちのために最善の結婚を取りはからい、朱雀院は女三宮を光源氏に、今上は女二宮を薫にと、それぞれその時の最も理想的な婿に降嫁させたことは、そうすることによって母女御たちの霊を慰撫することを祈念していたのであったからではなかろうか。二人の藤壺女御が相似た境遇を生き、遺恨を抱いて死んだことが、それぞれの女宮の降嫁に朱雀院と今上をして尽力させることになったのであろう。あるいは逆に院や今上が女宮

たちのために格別によかれと計らう行為は、かれらがそれぞれの女御に生前十分に報いることのできなかった代償を果そうとしているということであろう。朱雀院が女三宮の降嫁に熟慮の限りを尽したのも、女三宮の未熟さをいたわる親としての心情によるだけでなく、「高き位にも定まり給ふべかりし人」（「若菜上」一五頁）であった藤壺女御の「うらみたるやう」にて死んだことへの償いであったからにちがいない。即ち女三宮降嫁に対する朱雀院の苦慮の背景には、この未熟な少女に対し親として現世的次元での最高に完璧な安心を準備しておこうという配慮にとどまらず、怨みを抱いたまま死んだ母女御の霊を鎮撫しようとする、いわば霊的次元の要請を感じていたからであったと思われる。

宿木巻の今上帝の行動も同様に理解できる。女御については次のようにかたられていた。

わがいとくちをしく、人に圧され奉りぬる宿世、なげかしく覚ゆるかはりに、この宮（女二宮）をだに、いかで行末の心もなぐさむばかりにて見たてまつらむ、とかしづききこえ給ふことおろかならず。

（「宿木」六―一三二頁）

女御はじしんの宿世のつたなさを埋め合せるものとして、女二宮の繁栄をこそ念願していた。とすれば女二宮が当代の寵児である薫に降嫁したことは、まさに母女御の得心するところであったはずだ。今上の計らいはわが宿世を嘆きつつ死んだ女御の念願を実現するものとして、かの女の霊を安んぜしめるものであったにちがいない。ここでもまた今上にとっては、「睦まじくあはれなる方の御おもひ」は格別でありながら、「そのしるし」を得させることなく（「宿木」一三二頁）、遺恨のうちに死んだ女御の霊を慰撫することが課されていたのである。

このように不本意をかこち怨みを抱いて死んだ者に対する償いとして子の繁栄を計らってやり、それによって死者の霊を安からしめるというかたちは、源氏物語の人物関係にあたかもレディメイドのセットのようにくり返し現われ

る。いうまでもなくこうした設定は単なる型の問題ではない。女三宮なり女二宮の降嫁が朱雀や今上にとって喫緊の問題となる事情を、かれらの内在律として説明しているのである。どうして女三宮や女二宮が朱雀や今上の特別の関心の的になるのか。その「なぜ」を解き明かすものとして、怨みと償い、鎮魂の論理は導入されてくるのであり、かれらが女宮たちのために行動する内的な動機づけなのである。それは人物造型が常に内側からかたられる源氏物語の方法にほかならない。

桐壺巻の帝と更衣の関係も、右のような償いと鎮魂の論理を典型的に組みこんでいると思われる。更衣は後宮の女たちの怨み嫉みを一身に引受けて死んだ。それがいかに激しかったかは、「うらみを負ふ積にやありけむ、いとあつしくなりゆき」（「桐壺」一―一五九頁）、「そのうらみましてやらむ方なし」（同上一六二頁）等々の記事に明瞭である。桐壺帝の愛の深さゆえに他の女御更衣たちの怨みを買い、かれらの怨みの生霊によって桐壺更衣は死なしめられたのだといってよい。更衣の母が娘の死を「横様なるやう」な死であるといい、帝の寵愛を「かへりてはつらくなむ、かしこき御志を思う給へられ侍る」（同上一六九頁）とまでいったのは、まさしくそれが横死であり非業の死なのだと理解したことを示していよう。この発言は重要だと思う。そのような死にかたゆえに帝は更衣への償いを是非果さなければならないからだ。臨終を目前にして宮中を退出する更衣は、帝への別離を次のようにかたられた。

（更衣）かぎりとて別るる道のかなしきにいかまほしきは命なりけり
いとかく思う給へましかば」と、息も絶えつつ、聞えまほしげなる事はありげなれど（「桐壺」一―一六三頁）

更衣は生きていたいと訴え、言い置きたいことも言いえずに別れた。この時かの女はいったい何を遺言しようとしたのであったのか。非業の死者のためには帝はその遺志を十全に理解し実現してやらねばならない。この時更衣が訴えようとしたことに関して藤井貞和氏は、更衣は光君に東宮の位を希望したのであり、かの女の意志は故大納言が是が

非でも更衣を入内させねばやまなかった、更衣一家の遺志に基づくものであったといわれた。[1] 氏の解読に従いたい。帝はこのような更衣の暗黙の意思表明を了解しなければならなかったし、していたにちがいない。「故大納言の遺言過たず、宮仕の本意深くものしたりしよろこびは、かひある様にとこそ思ひわたりつれ」（同上一七一頁）と帝は述懐している。更衣を深く愛した帝は、更衣の入内に託された故大納言の念願をも理解していたであろう。万に一つの僥倖であれ、更衣腹の皇子が即位し、外戚として家門の隆盛をかちえるかもしれない――そこまでいかなくとも家の繁栄のため――という期待と祈りをになって更衣は入内したはずなのであり、帝の更衣への寵愛は「かひある様」をかたちに示してやることであったのだから、更衣を女御に昇格させ、光君に栄達を保証することは帝のつとめであった。その更衣は更衣のままで女御にもならずに、「横様なるやうにて」死んだ。今や帝が残された光君のためにある限りの力を傾注するのも自然であろう。美しく聡明この上ないにはちがいないが、後見の皆無な光君を、右大臣に後見されている第一皇子を引越して東宮につけようと念じ続けたのも、更衣が臨終の別れぎわに、「ことばで訴えることを越えて、眼や表情で何かを訴えようとし」[2]た、その「何か」に応えることであったのだ。更衣と帝の関係がことばを越えた暗黙の意思の交流を確実に成り立たせていたということは、かれらの稀有な愛にふさわしい。光君は更衣のかたみとして、またその美しさ聡明さゆえに寵愛されただけでなく、いわば非業の横死者のいまわのきわの念願をかなえてやるためにも帝の光君への愛は加重されたのである。それが帝の更衣への償いであり、更衣の霊を慰さめる術法であったからだ。むろん光君は立坊できなかったが、代りに臣下として左大臣の婿となり、確固とした後見を得て栄進を約束された。これは更衣の暗黙の訴えを、それが立坊であったとすれば、そのとおりに叶えることではなかったが、故大納言が家門の繁栄を念じて更衣を入内させた遺志は、応分に報われたことになるであろう。大納言一家は安らかに瞑目できるはずである。このように桐壺帝の光源氏寵愛の背景にも償いと鎮魂の論理があったと思われ

る。それは平安朝の習俗や霊魂観の投映であるという以上に、源氏物語的な論理として桐壺帝の生きかたをさし示すものであった。後宮の政治的バランスに抵抗して更衣との愛に生きた帝の生きかたの一貫性が、償いと鎮魂においてまっとうされているのである。

非運の死者に対する鎮魂の術法は源氏物語の方法の原則であったのではあるまいか。人物造型ないし人物関係の設定の場で、内的必然の構築のために償いによる鎮魂の論理は一貫していると思われるのである。

玉鬘巻は冒頭の一節をはじめとして、源氏が玉鬘を引取るに到る過程で、源氏じしんの述懐としてあるいは右近の口を借りて、くり返し夕顔への追慕が確認された。それがかつてのかれの夕顔への溺惑の深さの証明であり、それゆえ玉鬘を養女に迎えさらにかの女を恋するに到る源氏の内的必然をうち堅める作業であったことは、いわれているとおりであるが、同時にそれは夕顔死後、終始かれの胸奥に償いが懸案として生き続けたことをも意味しているであろう。たとえば右近は次のようにかたっていた。

いたづらに過ぎものし給ひしかはりには、ともかくもひき助けさせ給はむ事こそは、罪かろませ給はめ。

（「玉鬘」三―一一九頁）

頓死した夕顔の代りに玉鬘を助けることが罪ほろぼしになるのだと右近はいうのである。それに対して源氏は「いたうもかこちなすかな」とはぐらかし気味に「ほほ笑みながら」、しかし「涙ぐみ給ふ」（同上）のであった。右近の端的明快な発言こそ、頓死した夕顔のために公然と葬儀を行うことを許されなかった源氏の遺恨と負債の思いに切りこんだ適切この上もないことばであった。かれの「ほほ笑み」と「涙ぐみ」の交錯した表情は、あまりに的確に図星を言いあてられた当惑ででもあろうか。実際かれは夕顔が死んだ時、それが自分の「浮びたる心のすさび」によってもたらされたのだと非難されることは、「いとからきなり」（「夕顔」一―二七三頁）といったが、それは夕顔に対して

無責任な気持で交渉をもったのではないというのであり、かの女を死なしめた責め苦を自覚していたのであった。しかもその死は横死に等しいものである。その時の物の怪が六条御息所の怨みの生霊であったことはまちがいあるまい。物の怪出現の直前、源氏はその心中を「六条わたりにも、いかに思ひ乱れ給ふらむ、うらみられむに、苦しう道理なり」（同上二六三頁）とかたられていた。桐壺更衣が後宮の女たちの怨みに責めたてられて病没したように、夕顔は六条御息所の怨みによって殺されたのである。状況はちがうが、夕顔の死は更衣の死と同じ型を踏まえつつ、より劇的に構成されているといえる。こうした非運の死を死なしめたことが源氏に夕顔への償いの課題を残したのだといえよう。夕顔が死んだ直後、右近から遺児のことを聞いた源氏は、即座にその子を引取りかたみとして育てたいと提案したが、それは実現しないまま――当面の物語の展開からは放置されたままで、十数年を経過してしまう。その間玉鬘が九州下向と上京にさすらったことは、霊魂観に即していえば、夕顔の霊に安息のいとまもなかったことになるのであろうし、「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れ」ることもなかった（「玉鬘」九一頁）源氏もまた、かの女の霊を安んぜしめえない心理的負担を抱き続けたはずである。右近のことばは源氏が果さねばならぬ懸案を言いあてていたのである。玉鬘を養女として六条院に時めかすことで源氏は夕顔への償いを完了するのであり、それが何よりの夕顔への供養であり鎮魂でありえたのだ。非運の死者に対する償いと鎮魂は物語世界の鉄則として埋設されていたのではなかろうか。

2

二人の藤壺女御の場合と、更衣夕顔の場合との違いは、前者には明確な怨みの契機があるのに対し、後者にはかの女たちじしんのそれがなく、横死に等しい死にかたが強調されているという点だが、共通するのはいずれも遺児の繁

栄が熱心に計られているということである。死者の鎮魂は生き残った者の心からの追悼の有無が決め手になるといわれるが[3]、それにとどまらず死者の現世への懸念や懸案を現実的に解決してやることが、鎮魂の大きな課題とされていたのだと思われる。

葵上の死は夕顔の場合と同様、源氏物語の中で最も劇的な死に属するであろうが、六条御息所とその父大臣との二つの熾烈な物の怪にとりつかれて殺されながら、かの女の霊はすっかり鎮まっていた。それはこの死の時に到って葵上が結婚後はじめて光源氏との融和を実現しえたに加えて、かれの手厚い追悼によって遺恨を解消しえたからであるとともに、かの女にそれ以上具体的な現世への懸案がなかった——夕霧のことは源氏と親たちに安心してまかせてよいという事情によっていたのであろう。宇治の大君の死も物の怪のしわざとされるが、かの女には宮家の掟に殉じようとする死の決意が明確であり、むろんかの女の人生が抱えこんだ苦悩の集積は単純に晴らされるものではなかったろうが、にもかかわらず薫との融和とかの女の懸念の的であった中君に対する薫の庇護の厚さとによって、大君は救われていたのであろう。死者に対しては死の時の手厚い追悼供養に併せて、その現世への心残りを具体的に解決してやることが必要であったのだ。ここには死者の怨みはもとより現世への心残りも放置しておけば、現世を脅かすに到ると信じる心理的機制が強く働いているであろう。総じて怨みの契機が現世への懸念、懸案をも含めて、ここには重く介在しているわけで、この背景にはやはり御霊信仰的要素を想定しなければならないだろう。とりわけ死にゆく者の怨みの契機と生き残る者の死者に対する負債の念がからみあった死の状況は、一般的な供養を越えた償いと鎮魂を要請したのであったと思われる。

堀一郎は、古代氏族制社会において特定種族の、特定の地位の、特定の生涯を送った人にのみ可能であった「人神」の信仰が、氏族制社会の崩壊に伴って個性の自覚が芽生えるとともに民間に解放され、そこに御霊信仰が成立し

たといわれた。すなわち「古代人神観念の民間解放、或は一種の頽衰状態」として御霊信仰は風靡したのであり、「何人も不時に死し、怨をふくめば、その霊は一念の凝る所、必ず祟咎をあらはし得るとする思想にまで発展」したと説かれた。[4] おそらく右にみてきた償いと鎮魂の形式は、御霊信仰の日常化された死霊への畏怖感を共通の土壌にしていたのである。

源氏が秋好を中宮につけたことも六条御息所に対する償いと鎮魂をめざすものであったろう。秋好の中宮擁立が藤氏の抵抗をはねのけた、いかに前例のない措置であったかは、河海抄が指摘したところである。[5] これは単に源氏にとって権勢確立の後宮政策として必要であったというだけではなかった。六条御息所の遺言を遵守し、かの女の怨みに報いる最善の術法であったはずなのだ。かれはのちに次のように述懐している。

（六条御息所に対して）われ罪ある心地して止みにしなぐさめに、中宮をかく、さるべき御契とはいひながら、取りたてて、世の譏り人のうらみをも知らず、心よせ奉るを、かの世ながらも見なほされぬらむ。

（「若菜下」四―一六三頁）

秋好中宮の実現に強固に抵抗した「世の譏り人のうらみ」の中心勢力は、いうまでもなく藤氏である。源氏はそれを無視した。むろん権勢のためであったが、同時にそれと同等の重みをもって、御息所に対して抱いた「われ罪ある心地」という負債の念慮が大きくのしかかっていたからである。だから秋好中宮実現に関しては、御息所も「かの世ながらも見なほされぬらむ」というのであり、そうした罪ほろぼしによって御息所の霊を安んじようとしたのである。御息所じしんのちにこの源氏の発言を受けて、物の怪として出現した時、そのことに関しては、「中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見奉れど」（同上一八三頁）と謝意を表しさえした。源氏が御息所に対する「罪」の念慮から秋好を最大限に後見したことは、御息所の怨みをつぐなうに足りる確かな術法であった

のだ。

だが、にもかかわらず、かの女の霊はついに鎮魂されることがなかった。物の怪として紫上を絶息させた御息所の死霊は、右のような感謝の発言から反転して、生前の怨みの晴れやらぬことを次のようにかたった。

道ことになりぬれば、子の上までも深く覚えぬにやあらむ。なほ自らつらしと思ひ聞えし、心の執なむとまるものなりける。

（「若菜下」一八三～四頁）

御息所の「心の執」とは、かの女が光源氏からこうむった屈辱的な愛の履歴の集約にほかならない。かの女を伊勢下向に追いやったような源氏の「あさましき御もてなし」（「賢木」二―六四頁）が、御息所の怨みを形づくっていたのである。そのことは源氏じしん十分承知してもいたので、かれは紫上に向って御息所から怨まれるのも道理であると述懐していた。「うらむべきふしぞ、げに道理と覚ゆるふしを、やがて長く思ひつめて、深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか」（「若菜下」一六三頁）とかたっている。怨み怨まれることを双方当然と認めあうような関係が両者の間にあったのである。これが死後十数年を経て御息所の死霊が物の怪として顕形する前提であったのであり、その怨みの深さゆえに源氏の不用意にもらした御息所誹謗を直接の言質として、物の怪は出現したのであった。

六条御息所の死霊は二つの貌をもっていたのである。六条の旧宮が源氏の宰領下に秋好中宮によって繁栄することを見守るという祖霊ないし家霊[6]としての性格と、生前の光源氏に対する「つらしと思ひ聞えし心の執」によって怨霊となって危害を及ぼすという性格とである。この御息所の死霊の二面性は矛盾撞着するようであるが、むしろこうした二面性こそ古代からの霊魂観の固有の性格であったのではあるまいか。死者の霊が子孫の家に親しく往来すること、子孫の饗応とその繁栄によってその霊が慰鎮せられることは、すでに説きあかされている[7]。だから逆に冤罪によって葬られ、あるいは怨みをこの世にとどめて死に、ないし子孫断絶によって祭を享けることのなくなった死者霊が

怨霊化するというのは、常態の死者霊の裏返えされた方向性であろう。死者霊の祖霊的性格と、怨霊ないし物の怪としての性格とは、同一物の逆方向に典型化されたかたちを示すものと理解してよいはずである。それが死霊の生態であったと考えられる。

その一例を宇津保物語に見ることができる。蔵開上巻には廃虚と化した京極の旧邸のいかめしい蔵にまつわる怪事がかたられている。その蔵に略奪を試みるものは死に、「夜は人にも見え侍らで、馬に乗りて来つつ弓弦打をしつつ、夜廻りするやうになむ侍る」（日本古典文学大系本『宇津保物語』二―二五七頁）という、目に見えないものの不思議によってその蔵は守られたのであった。仲忠は蔵を開けようとする時、「此の蔵、先祖の御霊開かせ給へ」（同上二五九頁）と祈り、自分の手で蔵が開いた時、「これは、げに先祖の御霊の我を待ち給ふなりけり」（同上）といったが、まさしく蔵を守ったものは祖霊であった。この祖霊が略奪者には死をもたらすほどの激しい祟りを示し、子孫にはあらたかな霊験をもって加護を示したという二面性こそ、死者霊の固有の本性であったと思われる。六条御息所の死霊の家霊的性格と怨霊的側面も、基本的には『宇津保』の「先祖の御霊」と同様のものと解してよいであろう。『宇津保』ではじめ悪霊化して祟りを現わしていた祖霊が、仲忠という正系の子孫の繁栄と祭りを享けることで鎮魂されるのに対して、六条御息所の方ははじめは鎮魂されていたはずであるのに、のちに悪霊として顕形する点、不可解に思われるのだが、ごく単純に考えれば、秋好に子がなかったこと、即ち御息所の家系の断絶が明瞭になったことと死霊の出現は関連していたのではあるまいか。ともかく子孫繁栄、「家」の発展によって死霊が鎮められるという観念は基本的なものであったと思われる。

3

このような鎮魂の観念は源氏物語の多分きわめて重要な方法上の原理であったと思う。というのは、鎮魂の観念が物語世界の霊験譚的構造を支えていたと考えられるからである。明石巻で桐壺院の霊は須磨の浦に沈淪する光源氏を見かねて、「海に入り、渚にのぼり」して源氏の夢枕に現われ、住吉の神の導きに従ってこの浦を去れと告げる（「明石」二―一六九～一七〇頁）とともに、宮中の朱雀帝の夢にも現われて、「御気色いとあしうて睨み聞えさせ給ふ」（同上一八六頁）た。この時桐壺院の霊が源氏のことで帝を叱責し、それによって源氏の召還が実現したという物語の展開は、それじたい霊験譚にほかならないが、ここでいう霊験譚的構造とはそれにとどまらず、光源氏の栄華の全体をさしている。すなわち桐壺院の霊の出現は単に源氏救出のためにのみあったのではなく、皇室の祖としての立場こそ重視されるべきであった。院はその遺言において、東宮の皇位継承のことと源氏を「おほやけの御後見」とすべきことを、「かへすがへす聞えさせ給ひ」、朱雀帝もそれに違背しない旨を、「かへすがへす聞えさせ給ふ」（「賢木」二―七三～四頁）ていたのだが、それが今すっかり反故にされて弘徽殿ら外戚によって王権が蹂躙されていた。この外戚の専権は橋姫巻にかたられるような八宮の東宮かつぎ出し工作にまで進展しつつあったと考えてよいのであろう。源氏は須磨に退去し、東宮は廃替されようとしていた状況が桐壺院の霊を呼びだしてきたのである。この時期における朱雀帝の眼病、帝の祖父太政大臣の死、弘徽殿大后の病悩その他の天変変事について、三谷栄一氏はこれを「御霊の祟り」といわれたが、[8] 従いたい。氏はそこでこの御霊を光源氏と桐壺院のそれとされているようであるが、遺言を反故にされた桐壺院の死霊によるものと限定してよいのではあるまいか。この時院の遺言も遺志も完膚なきまでに反故にされきっていたからである。院は皇室の祖として冷泉の即位と光源氏輔弼の実現が王権の繁栄と安泰であ

ると考え、それを祈念していたのであり、それゆえ現状を黙過できなかったのである。源氏が召還ののちに桐壺院のために「御八講」を主催するのは、建て前は「かの沈み給ふらむ罪救ひ奉ることをせむ」(「澪標」二―二〇四頁)という仏教の論理による追善供養であったが、実質は「朱雀院治世の外戚政治に対して、天皇親政の正統を標榜する一世源氏の自己主張」[9]として、桐壺院の遺志が回復されたことを宣言するものであり、その意味で院の鎮魂を果すことになったのだと考える。こうして光源氏の後見のもとに冷泉帝の治世が安定と繁栄をきわめることが桐壺院への鎮魂の完遂であったのであり、院は皇室の祖霊として冷泉帝親政と源氏の栄華を見守ったのであったと思う。光源氏の栄華が冷泉帝の即位と表裏一体であったことは、桐壺院がかれらの祖霊として守護したからだといってよいのであろう。光源氏の栄華の霊験譚的構造とはこのようなかたちをさしている。

同様のことは六条御息所についてもいえるのではあるまいか。御息所の死霊が悪霊的家霊的二面性をもっていたことは前述したが、かの女の物の怪は生前のわが体験に鑑みて秋好中宮のために、「ゆめ御宮仕の程に、人ときしろひ嫉む心つかひ給ふな」(「若菜下」四―一八四頁)と教誡していた。これはほぼかの女の遺言に見合っている。御息所は源氏に後事を託した時、娘を「思ほし人めか」すような扱いは困るといい、「憂き身をつみ侍るにも、女は思ひの外にて物思ひを添ふるものになむ侍りければ、いかで然るかたをもて離れて見奉らむ、と思う給ふる」(「澪標」二―二二七頁)とかたっていた。女としての愛執の苦悩からはまぬがれさせてやりたいと念じた御息所の一念は、死後物の怪となっても変ることのなかった祈りであった。娘の幸福のためにかの女は「憂き身」の体験を教訓にしようとしたのである。このように物の怪が娘の幸福を念じ、また娘が中宮についたことに感謝したことは、祖霊が一般に「後葉の擁護」[10]を念じ、さらには霊威を示現したかたちと基本的には違わないだろう。御息所の物の怪は女三宮が出家した時、「かうぞあるよ」(「柏木」四―二三九頁)と放言し、手柄顔にうち笑って退参するという悪霊化のきわみをも

ってかたりおさめられたが、そこに到る過程で娘の幸福や繁栄を念願し、秋好が中宮に在位し六条院が内面的危機を顕在化することなく栄えていた限りで確かに鎮魂されていたのであったと思う。このような御息所の鎮魂と相互に媒介しあうことで六条院の栄華はありえたのであろう。

明石入道もまたあえていえば生きながらすでに祖霊的なのであって、明石という異域から一家の発展を見守っていたわけで、かれこそ子孫繁栄が実現しなかった時、悪霊となって御霊的祟りをあたりかまわず撒きちらしたであろうと思われる。こうした各家家の祖霊の力の結節点に光源氏の栄華は実現したのだと思う。

4

桐壺院が皇室の祖霊として冷泉王権と源氏の繁栄を導いたかたちは、光源氏においてもかれがその子孫のために祖霊となってかれらの発展にくみするというかたちに引継がれていたのではあるまいか。

源氏には遺言らしい遺言はない。それはかれに子孫の将来について一点の懸念もなかったということかもしれない。だが子孫繁栄への確信はそれとして、子の少なさを遺恨としていたことはまちがいない。紫上の一周忌が近づいた頃、法要の相談に訪れた夕霧が、紫上が形見の子を残さなかったのが残念だといったのに対して、源氏は次のように答えた。

「それは、かりそめならず命ながき人々も、さやうなることの大方少かりける。みづからの口惜しさにこそ。そこにこそは、門はひろげ給はめ」などのたまふ。

（「幻」五―一二五頁）

光源氏は「源氏」の先祖となる人物である。先祖としては一家一門の繁栄は当然の宿願であろう。そのようなかれにとって、子が少なかったことはまさしく「みづからの口惜しさ」であったにちがいない。これは他方で冷泉院に子の

ないことを嘆いたのと共通して、先祖として「家」の発展を祈念した心情を示すものであろう。冷泉院のばあい仮に皇子があり、その皇子が即位したとしても、そこでは光源氏の名は秘められ続けるほかない。にもかかわらず、かれはこの秘められた血の系譜の存続を願った。おそらく源氏にとって冷泉院こそみずから即位できなかった不運を代替するものとして、唯一の正系の嫡子と考えられていたのであろう。冷泉院に子のないことを、「飽かず」「口惜しくさうざうしく」思う（「若菜下」一二八頁）のも、王権に自己の正系が存続することの閉ざされたことによる。かれには秘められた関係においてであれ、王権に対して直系の先祖となる道はなくなったのである。だが先祖と子孫の関係が血脈を最も中核的な絆として成立するとすれば、ここに示された源氏の述懐は、まさに先祖として子孫の永続と発展を願う意識を明瞭に示しているであろう。桐壺院が皇室の祖であったように、光源氏は「源氏」の祖となって子孫のために仕えることを、自明の道理とされていたのだと思われる。

匂宮巻にまとめてかたられる、かれの子孫の盛栄――明石中宮腹の第一皇子が東宮に、第二皇子が「次の坊がね」に（「匂宮」五―一三四～五頁）、第三皇子匂宮もまた帝、后の寵愛厚く東宮候補になっており（「総角」六―六九、七九頁）、一方夕霧右大臣の子女も大姫君が東宮に入内し、中姫君は第二皇子に婚し（「匂宮」一三五頁）、六君また「親王達上達部の、御心つくすくさはひ」（同上一三六頁）であって、のちに匂宮に婚したわけで、光源氏の孫たちが代々天皇皇后となって権勢の頂点を覆いつくすことがかたられていた。むろん薫もそうした栄華の例外ではなかった。明石中宮と夕霧右大臣を介して、光源氏の一統の発展はとどまるところを知らない勢いにあった。夕霧は夕霧でまた「わが世にあらむかぎりだに、この院荒さず、ほとりの大路など、人影かれ果つまじう」（同上）と心がけ、「いづかたの御事をも、昔の御心おきてのままに改めかはる事なく」（同上一三七頁）、花散里他の女たちに奉仕して、光源氏の遺志を忠実に遵守した。こうした遺志の尊重と子孫の末長い安泰の見通しによって、源氏の霊が鎮魂さ

れたことは疑いない。のみならず、かれは「天の下の人」すべてに追慕された（同上）。源氏は冥界に安んじてよいのだ。匂宮巻は光源氏死後の後日譚にちがいないが、それは同時に光源氏鎮魂譚であり、かつ「源氏」一門の祖となったかれの霊に守られた子孫の繁栄をかたる霊験譚――具体的に光源氏の霊験は何一つかたられないが――の構造をもつ物語であったと考える。

このような匂宮巻と紅梅竹河の二帖はどのような関係にあるのか。紅梅巻の致仕の太政大臣家は柏木亡き現在、按察使の大納言によってになわれている。権勢家であることはいうまでもないが、夕霧右大臣の勢威には及ばない。その違いはかれらの家庭の内幕の相違に端的に示されているであろう。夕霧が雲井雁と落葉宮に、「夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住み給ひける」（「匂宮」一三六頁）という安定を実現しているのに対して、大納言はもとよりの北の方に先立たれ、真木柱を後妻に迎えているということじたいが、すでに不均衡を暗示する。それぞれの連れ子の間に、お付きの女房たちによってかもし出される軋轢は、真木柱の才覚によって事なきをえているが、かの女たちの身のふりかたは大君の東宮入内がまずまずの成功――それとても夕霧の大姫君が女御として「並ぶ人なげにて侍ひ給ふは、きしろひにくけれど」（「紅梅」五―一五一頁）という状況である――であるのを除けば、中君は大納言の意に反して匂宮から見向きされず、宮の君は母真木柱によって、「世を背く方にても（中略）過し給はなむ」（同上一五四頁）と考えられているといったぐあいで、夕霧の女子の花やかさとの径庭はこの上ない。大納言としては東宮に入内した大君に、「春日の神」（同上一五二頁）の霊験が示されて、皇子誕生、大君立后を期する以外、当面どのような手の打ちようもありえないのであった。光源氏の一統のいやまさる栄華にくらべて、かつてのライバルの家は相対的に一段と凋落を深めているのである。匂宮巻が直接に源氏一門の繁栄を謳歌したとすれば、紅梅巻は致仕の大臣家との対比によって、光源氏の余慶の偉大さを間接的に確認するのであり、その意味で紅梅巻は匂宮巻の源氏一門の栄

華の主題に奉仕する位置に立つといえよう。

竹河巻の位置は、「右の大殿（夕霧）、致仕の大殿の族（按察使大納言）を離れて、きらきらしうきよげなる人はなき世なり、と見ゆ」（「竹河」五―一九四頁）という一文に端的に示されているであろう。髭黒没後のかれの一家は、生前の髭黒の「情すこしおくれ、むらむらしさ過ぎ給へりける御本性」（同上一六五頁）が同族との離反を拡大し、遺族に困難を招来していた。光源氏の余慶とは正反対に、髭黒の余殃が今や一家をになう玉鬘に必要以上の悪戦苦闘を強いることになっていたのである。一家の動静は次のようなぐあいであった。まずかの女の子息たちが、「左近中将、右中弁、侍従」（同上一七〇頁）という若輩にすぎず、大君や中君が今上帝に入内しても夕霧や按察大納言に伍して後見たりうることは不可能であった。だから玉鬘が大君を冷泉院に入内させたことは、その限りで適切な判断であった。しかしそれが帝の不満を誘発し、中将や弁の不満を増殖し、母子の間に確執をもたらすのみならず、冷泉院の大君寵愛が弘徽殿女御を刺激して、「くねくねしき事出で来などして」（同上二〇〇頁）というように、玉鬘の判断はすべて裏目に出る。もはやこの一家は権勢の主流から完全に後退したのであり、玉鬘がめっきり愚痴っぽくなったのもゆえあることであった。

つまり、かつて致仕の大臣家と髭黒の大臣家とは、光源氏の物語の脇をかためた双璧であったが、今や源氏一門のみが以前にまさる抜きんでた栄華を誇り、髭黒の一家は昔日の面影を失い、わずかに按察の大納言が源氏一門に追随しようとしているというのが、匂宮、紅梅、竹河三帖のさし示す現状であった。こうしたかたちで三家の後日譚がかたられたところに、源氏一統の先祖となった光源氏の余慶、さらにいえば霊威を認めたいのである。光源氏は祖霊として子孫の発展を見守り、その繁栄によって鎮魂されるという霊験譚の構造があるのではないかと考える。幻巻にかたられたような完璧な心の整理と準備によって出家し死を迎えたことで、かれの人生は完結したのではなく、偉大な

先祖として鎮魂されることで光源氏の生涯は閉ざされることをえた――かたりおさめられることをえたのではなかったか。匂宮、紅梅、竹河三帖は宇治十帖への梯であるにちがいないが、同時にそれ以上に光源氏の鎮魂のための讃歌であり挽歌であったと思うのである。

5

源氏物語の世界は現世的現実だけで完結するのでなく、その延長上に霊の世界を感受し、両者は密接に交感しあうものとしてかたられていた。藤壺の霊は源氏が不用意にかの女のことを紫上にかたったことを咎めて、「いみじくうらみ給へる御気色」で源氏の夢にあらわれ、「うき名」の漏出のために「苦しき目を見る」と怨んだ（「朝顔」三―三八頁）が、それは源氏に秘匿しおおせねばならない秘密の厳守を喚起し、あわせて供養の必要を自覚させた。死者の霊は現世に対する懸念や懸案によって、現世とたしかに交感したのであり、そうした霊の実在は現実の人間の世界と等価にみなされていた。たとえば源氏は右のような霊の訴えに対して、「何わざをして、しる人なき世界におはすらむを、とぶらひ聞えにまうでて、罪にもかはり聞えばや」（同上三八～九頁）と思うのである。「とぶらひ聞えにまうでて」というところに、霊の世界をいかに身近に実感していたかが知られる。また「罪にもかはり聞えばや」というのは、藤壺と源氏がかつて東宮冷泉の危機に際して、それぞれ「わが身をなきになしても」（「賢木」二―一〇四頁）、「惜しげなき身は亡きになしても」（「須磨」二―一三四頁）といった言いかたと寸分ちがわない。愛する者の困難や苦悩を身代りによって救ってやりたいというのである。ここには霊界と現世との隔たりや差異は心理的には皆無である。これほどに痛切でないにせよ、柏木の霊も遺愛の笛が夕霧に渡ったことを不本意として、かれの夢に現われ、「思ふかた異に侍りき」（「横笛」四―二七七頁）と告げたし、宇治の八宮も匂宮と結婚した中君を案じて、「い

と物おぼしたるけしきにて」（「総角」六―八六頁）中君の夢に現われた。むろんそれらに対し必要な対応がなされたこと、いうまでもない。

このような霊の活動は、これまでに見てきた例をも含めて、単に物語の構想上の小道具であったのではないだろう。死霊の実在、その現世との交感、現世の側からの適切な対応の必要性ということは、源氏物語において現世がそれだけで単独に自立し完結するものではなかったことを示している。いわば現世はもう一つの人間的実在としての他界の眼によって視られており、それとの調和的関係の樹立によって安定しうると考えられていたのである。こうした霊界との調和的関係によって現実の安定を獲得するという観念が、現世の人間をして死霊の意思に的確に対処することを必須の課題たらしめたのであるとともに、源氏物語の霊験譚の特徴をなしていたのではないかと思う。源氏物語は霊的実在を、宇津保物語のように直接に加護や奇瑞をもたらしてくれる超越的なものとして設定することなく、現世の人間の内的意識のうちに開顕する存在として位置づけていた。だから桐壺院が冷泉帝や光源氏を守護したであろうことも、光源氏がかれの子孫の繁栄を見守ったであろうことも、『宇津保』であれば俊蔭の加護や琴の奇瑞としてもろに露出させたような霊験譚は、源氏物語では不可能であった。いってみれば、『宇津保』ではじめに霊験があったのに対して、『源氏』では霊験じたいの現実化は後景に退き、死者の霊の意思に添うところに霊験譚的構造が築かれてくるのであった。死者霊を慰鎮する術法が、その子孫の繁栄を導くことであり、死者霊は子孫繁栄を見守ることで鎮魂されたということ、死者霊の意思に叶うことが現実の安泰を確保する道であったということ、こうした霊魂観を源氏物語は所有したのであったと思う。そのような霊魂観を構造化したところに光源氏の栄華は実現したのであったし、また人物造型ないし人物関係の設定においても、それは原理的な方法として一貫されていたと考える。

注

(1) 藤井貞和「神話の論理と物語の論理」『日本文学』一九七三年一〇月。
(2) 1に同じ。
(3) 三苫浩輔「源氏物語に見える死霊鎮撫」その二『沖縄国際大学文学部紀要（国文学篇）』第四巻一号。
(4) 堀一郎『我が国民間信仰史の研究(二)』（東京創元社）四五八～九頁。
(5) 玉上琢弥編『紫明抄河海抄』（角川書店）「乙通女」三七三頁。拙稿「源氏物語の『恥』をめぐって」『日本文学』一九七七年九月参照。
(6) 藤井貞和『源氏物語の始源と現在』（三一書房）一五五頁。
(7) 柳田国男「先祖の話」『定本柳田国男集』十巻（筑摩書房）四九～五四頁。堀一郎、前掲書、四六三頁。
(8) 三谷栄一『物語文学の世界』（有精堂）一六一～二頁。
(9) 秋山虔『源氏物語』（岩波新書）五三頁。
(10) 拙稿「先祖と霊験」関東学院女子短大『短大論叢』五四集、昭和五〇年一〇月。